子どものかかわりを増やす授業のユニバーサルデザイン
～体育科の授業改善に生かす特別支援教育～

東部教育事務所　指導主事　中村 小百合

１　研究の成果と課題をふまえた平成２７年度の実践内容

（１）研究の内容と成果

平成２６年度に派遣された高知大学大学院では、大きく２点について研究した。

１点目は、中学校の実践に着目した「ユニバーサルデザインを取り入れた支援」についてである。アンケートや授業観察から現状を把握し、子どもの「わかる」「できる」授業の具現化を模索した。授業観察を行った後で、具体的な支援や授業改善の方法について、授業者と協議を行った。その成果は、授業者や生徒のアンケートからも肯定的評価の増加という形で効果を認めた。

２点目は、授業改善を推進するための方法として、特に子どものかかわりを増やす授業のユニバーサルデザインについてである。「行動の背景や文脈の分析に基づいた支援方法」をチェックシート形式に作成し、Ｔ１・Ｔ２の教員に授業後にチェックを入れてもらい授業改善を図った。例として、机間指導の時に、目視確認のみならず、ノートに丸付けをしたり、シールを貼るなどの評価や出来栄えを短い言葉で表現して回るなどの個別の評価活動である。また、Ｔ２も積極的に声がけや評価に加わり、机間指導で早めに声がけした方がよい生徒や繰り返し支援が必要な生徒のところを回るようにするなどの意識化も有効であった。

（２）平成２７年度の実践内容

本年度、東部教育事務所指導主事として、東部管内の小・中学校に訪問指導を行った。

ア　かかわりをもたせる授業づくり

（ア）体育の副読本活用事業研究校での実践

「小学校副読本活用事業」では、東部教育事務所管内の２校が指定校とされ、昨年５月～本年２月迄、各校２回/月訪問を行った。運動好き・体育好きな子どもの育成を目的とし、副読本の効果的な活用方法について実践を通して、体育の授業改善を図った。

授業のポイントや児童を評価する言葉について授業者と事前確認をし、児童と教員、児童と児童のかかわりを持たせた。このことにより、児童への価値付けが進み、児童の教え合いや、評価し合う場面が増えた。

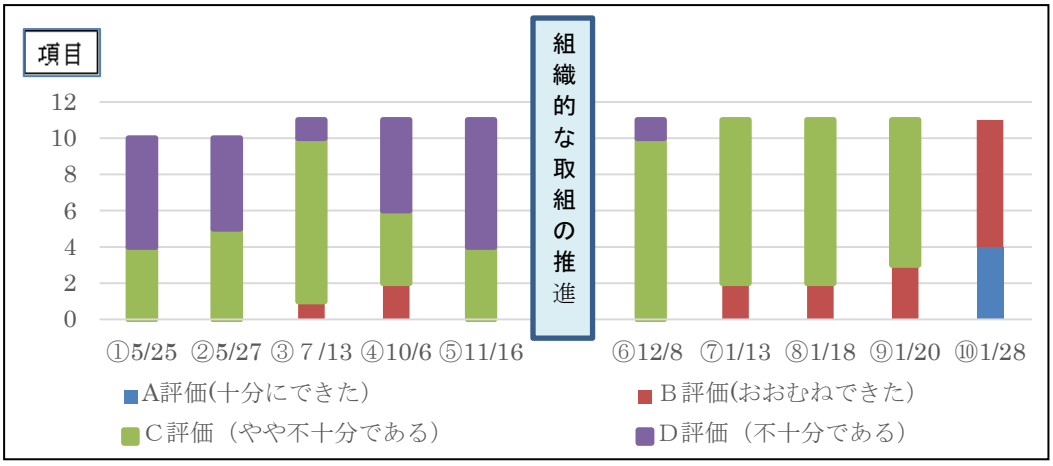
特に、効果の著しかったＡ教諭の１０回の訪問指導評価の変化を下のグラフ１に示す。

私は、Ａ教諭が５回目の訪問を終了した段階で、授業改善がなかなか進まなかったため、これまでの指導を転換すべき時期であると管理職に働きかけた。このことにより、推進役の教頭が今後２ヵ月の見通し（Ａ教諭の授業を校内で見合うことや研究発表会に向けての役割分担等）を立て、学校として、研究推進する組織が確立した。

６回目からは、同小学校が組織的な取組へと大きく変化したことにより、７回目以降はＤ評価が０に向上した。最終回の１０回目にはＡ評価（＝青線）部分が出現し、Ａ・Ｂの肯定的評価のみとなった。それは、児童の表情や行動の機敏さ、授業者の表情、眼差し、児童の目線に降りるなどの行動に現れていた。

（イ）体力・健康アドバイザー支援事業での実践

体力面・健康面で課題があるとされた小・中学校３２校を訪問した。『特別支援教育のスタンダード』にある体育授業での視覚支援の具体例の紹介や授業の流れの示し方、振り返りの時間をもつなど、教室で行っている授業同様、分かりやすい授業づくりが必要であることをプリントで提示し、説明をした。



グラフ１　　Ａ教諭の訪問指導評価の変化

イ　行動の背景や文脈の分析に基づいた授業づくり（行動の要因を探り、かかわり方を変える。）

（ア）Ｃ小学校での実践

児童の指導に困り感を抱いている教員に考え方として提示。また、不適応行動を起こさせないために、行動分析が必要であること、また、教員の働きかけ次第、授業づくり次第で、児童が変化することも同時に伝え、その後の授業づくりに生かしていた。

（イ）Ｄ中学校での実践

不適切な行動を起こさせない指導として、対処療法的な指導に終始するのでなく、①現状把握 ②要因分析③手立て：予防的な指導が大切であることを多動傾向のある生徒例から、授業レベルでの取組が必須であることを説明した。

２　平成２７年度の実践の成果と課題

Ａ教諭の変容同様、学校全体としての成果として、職員室での学び合いや役割分担を検討し直し、児童に分かりやすい授業づくりに取り組む姿等が見られた。教員の表情の柔らかさと自信は、児童の表情や発言に直結していた。振り返りでは、仲間の頑張りを認め合うなか、個人名が多く出てくるようになった。Ｃ小学校のある学級では、「体育の授業は好きですか」の問いに対し、５月は肯定的評価が８０％、１月には９２％であった。しかし、授業改善に積極的に取り組んだ教員と、残念ながらそうでない教員とで、児童の感想に大きな違いが見られた。これは、私の指導上の課題ともなった。

児童生徒の「できない」「分からない」をその子どもや家庭の問題と捉えず、教員自身の授業の行い方・定着のさせ方の問題として捉え、具体的な工夫につなげることが必要である。目の前の子どもの実態から何が必要であるかを分析し、子ども達の「分かる」「できる」に結びつけていく。学校が組織（チーム学校）として取組を継続することにより、教員も、また、自信を持って授業に臨めるようになると考える。

どの教員も伸びる芽を持っている。今後も、各校を訪問する中で、教員の方々に「授業のポイント」と「かかわり」を意識した指導を行うことにより、１つでも多くの「できた」を教員に体得してもらい、子ども達の自信の幅の広さに繋げていきたい。